

土浦の歴史を学ぼうコースの見どころ案内
(記載内容は現地案内板等の説明文による)

桜橋跡

桜橋は、慶長九年（1604）の氷戸街道・一里塚の整備に伴う幕府の直轄工事で作られ、名面の由来は中世の桜川がここを本流としていたことによると言われています。川は昭和初期に暗渠となり現在は道路ですが、文差点の下には明治34年（1911）に竣工した煉瓦造り橋が埋まっています。現在、橋の欄干の一部や、土浦市の道路原標等が残ります。

矢口家住宅

矢口家住宅は土蔵造りで、建築年代は店蔵・袖蔵が嘉永2年（1849）、元蔵が慶応年間（1865～1867）である。現在も矢口酒店として営業をしている。

中城天満宮

創建年代不詳ですが、源義家が奥州征伐の軍馬を閲しか伝説があります。江戸時代には三月に駒市（馬市）がたち、沢山の人馬が集まりました。祭神は菅原道真で、書道・学問の信仰を集めています。

等覚寺・銅鐘

寺伝によれば、等覚寺の前身は、常陸藤沢にあった藤沢山三教閣極楽寺、その開基は了信と伝えられる、小田氏15代氏治（天庵）の弟治算（慶円）によって慶長十年（1605）現在地に移り、寺号を蓮光山正定聚院等覚寺と改められた。銅鐘は、土浦市宍塚般若寺、潮来市長勝寺の鐘とともに常陸三古鐘のひとつに数えられている。総高 134.9 cm、外径 73.8 cm。建永年間（1206～07）小田氏の祖「筑後入道尊念」すなわち八田友家が、極楽寺に寄進したものである。戦国末期、土浦城主菅谷氏に預けられた、その後、土浦城本丸内にあったが、明治17年等覚寺に返却され、現在に至る。

東光寺

東光寺は慶長12年（1607）心庵春伝によって開かれたと伝えられる。瑠璃光殿は元文4年（1739）の建立で、桁行・梁間とも方三間の平入りであり、棧瓦葺入母屋の屋根を乗せる。柱は上下が円みを帯びた綜柱、土台は布石でうける。四隅の組物は二手先である。軒の組物は一手先とし、化粧垂木は二軒垂木である。堂内天井は格天井である。小壁には、建物の方位に合わせて、棒の板に十二支の透かし彫りかおる。四方隅の唐獅子、妻虹梁部分の天邪鬼の彫刻とともに、この建物の特徴である。境内の墓地の南東隅の一段高くなったところが、土浦城の南門土塁の跡である。

高井城址

南北朝時代の城。

興国二年（1314）に高師冬に攻め落とされている。

上高津貝塚

今から、およそ3000～4000年前（縄文時代後・晩期）の貝塚跡。

明治39年（1906）に大衆小説家江見水陰によって発掘される。

上高津貝塚はまわりを小さな谷に囲まれた台地の縁に四つ貝塚が丸く並んでいる 特徴的な形をしています。広さが4.4ヘクタールもあり、千葉県の加曽利貝塚 や美浦村の陰平貝塚とならんで全国有数な大きな貝塚の一つです。

現在、上高津貝塚ふるさと歴史の広場として整備されている。

宍塚大池

全国に約21万ヶ所あるといわれるため池の中から、ため池百選に選ばれている。

茨城県は他に、砂沼湖（下妻市）、神田池（阿見町）が選ばれている。

郁文館正門

土浦藩の藩校郁文館の名称は第七代藩主土屋英直が名付けたもので、はじめは土浦城内に置かれていた。

天保十年（1839）第十代藩主土屋寅直の時、ここに新築して移った。

一名、文武館ともいい、文館と武館にわかれており、学者として有名な藤森弘庵や剣客の島田寅之助が指導にあたっていた。

その後、明治・大正時代にも洋学校化成館、新治師範学校、土浦高等小学校の校舎として使用されたが、昭和十年（1935）に取り壊され、この正門だけが唯一の遺構となった。

近くに西門跡がある。

神龍寺

神龍寺は曹洞宗の寺であり、天文元年（1532）に土浦城主菅谷勝貞の開基とされ雪田真良を開山とした菅谷氏の菩提寺と伝えられる。天保四年（1833）には大寅和尚により旧本堂が再建された。現在の本堂は平成十年（1998）に新築されたものである。

がまの油発祥の地

白水稻荷神社の隣に七兵衛長屋かおり、明治の後期にここに住んでいた人が外用薬を作るため真鍋地先表池付近に生息するがまを捕らえ、これを天日で乾かし種油のようなものと臓を混ぜて煮つめ液状化し貝がらに入れ、常州筑波山麓土浦の陣中膏はがまの油として、香具師らによって口上よろしく広く発売されたものである。

ツェッペリン飛行船の模型（亀城プラザ 1F）

昭和4年8月19日に世界一周の途中の飛行船グラフ・ツェッペリン号が土浦上空に姿をあらわし、霞ヶ浦飛行場に着陸。23日にアメリカに旅立った。

全長235.5m、最大直径30.5m、重量55.7トン、浮揚ガスの水素容積75000m³という大きさがあつた。4日間で30万人の見物客が押しかけた。

亀城プラザ1階に20分の一の模型が展示されている。

土浦城址

土浦城は、一名亀城とよばれ、平城で、幾重にも巡らした濠を固めとする水城でもあつた。城は、城跡に指定されている本丸・二の丸を中心に、三の丸・外丸のほか武家屋敷や町屋を含み、北門・南門・西門を結ぶ濠で囲む総構えの規模をもうものであつた。江戸時代の建物としては、本丸表門の櫓門・裏門の霞門、二の丸と外丸の間に移建された旧前川門（高麗門）があり、復元された建物としては、東櫓・西櫓がある。

戦国時代には、城主は若泉氏、信太氏、菅谷氏と変遷した、織豊期には結城秀康の支配下に入った。江戸時代の城主は松平（藤井）氏、西尾氏、朽木氏、土屋氏、松平（大河内）氏へと変わったが、土屋政道が再び入城して、以降明治維新に至るまで土屋氏（9万5000石）の居城となつた。

般若寺

般若寺は、寺伝によれば平安時代の天暦元年（947）平将門の次女又は孫娘の安寿姫（如蔵尼）により穴塚の台地に創建され、平安末期にこの地に移されたという。

鎌倉時代には、この地が小田氏領から北条氏領となり、それらの保護を受けたと考えられる。またこの時期には、奈良西大寺の律宗僧忍性（良観上人）が常陸国三村山極楽寺（つくば市小田）に来住し、般若寺も律宗寺院として栄えた、戦国時代には戦火にかかり堂塔を失つたが、江戸時代には土浦地域出身の三島検校が江戸護国寺の観音堂を移築して寄進した。（老朽化により昭和52年解体）

現在伝えられる文化財の多くは鎌倉時代に作られたものであり、そのすぐれた美しさと共に、かつての寺格と寺勢をうかがわせる。

銅鐘

建治元年（1275）源海上人が大勧進となり、河内国出身の丹治久友と地元の工人と推定される千門重延が鑄造した。常陸三古鐘（土浦市等覚寺、潮来市長勝寺銅鐘）の一つである。

源海上人は忍性と共に西大寺の興正菩薩叡尊の弟子で、同時代の記録には実道坊源海と記される。丹治久友は鎌倉大仏の鑄造に関わつた鑄物師で、この鐘は養寿院鐘（川越市）、東大寺真言院鐘、吉野金峯山蔵王堂鐘（現存せず）に続いて作られたものである。東大寺と吉野の鐘銘には、丹治久友が「鎌倉新大仏鑄物師」・「鎌倉新大仏寺大工」と記されている。